

## Ⅷ-4. 家庭科ハンドブック作成

家政学部住居学科 平田京子

家庭科ハンドブックは、アジアの発展途上国において家庭科教育を推進する際の教育モデルとして活用されることを目指し、本プロジェクトの中核をなすものとして1年の準備期間を経て、2年間をかけて作成した冊子である。

### (1) ハンドブック作成上の配慮点

- 「伝統や文化を大切にしながら、その国の独自の姿で進んでいく」ことを支援する。
- 国連やWHO等が定めている国際的条約や理念をベースにし、国際的に通用する教育目標を設定する。
- 家庭科を通した「家庭や地域への働きかけ」を想定し、子どもたちを通して家庭や地域がよりよい方向へ変わっていけるように支援する。
- 家庭科を指導した経験のない途上国関係者や派遣員などが、ハンドブックを参考に容易に指導ができるように学習の流れを考えた記述として、教師用指導書の機能をもつ。

上記の理念に基づいて執筆した。資料は我が国のデータ、国を問わず使える標準的なデータや教材そのものを掲載した。国情に応じて自国の資料を採用したり、対比的に我が国のデータ等を使用したりなど工夫して活用することを考えている。

### (2) 内容構成

小学校から高等学校までの学習指導要領を軸にすえ、日本の代表的教科書のタイトルや内容も参考にして、学習の順序に沿った目次構成にした。内容は、Ⅰ. 家族と家庭生活、Ⅱ. 食生活、Ⅲ. 衣生活、Ⅳ. 住生活、Ⅴ. 消費生活と資源・環境、の5つの領域である。

### (3) 各領域の構成

各領域とも、1頁目には各章の理念や解説、扱い方などを記述した。続いて小項目ごとに1～2頁を使って学習のねらい、学習時間、具体的な学習の流れや活動例、解説などを示した。教材としても使えるよう写真やイラスト、図、データなども盛り込んだ。また学習活動から子どもが考えたり理解したり身につけたりする内容を予測して解説も加えた。

途上国で家庭科教育を推進することは女子教育として、また女性のエンパワーメントとしての意味があり、将来的に男女共同参画社会を目指している。国際社会における家庭科教育の理念を学んだ子ども達が自国の生活をみつめ、新たに文化を育てることを期待する。